

## 占領期に出版された児童読物

— 「占領期検閲児童書目録」上巻を手がかりに—

### CHILDREN'S READING MATERIALS PUBLISHED IN THE POST-WAR OCCUPATION PERIOD: OCCUPATION PERIOD CENSORED CHILDREN'S BOOKS CATALOGUE, CLUES FROM PART I

谷 暎子

Eiko Tani

#### ABSTRACT

Occupation Period Censored Children's Books Catalogue, Part I was published in America in September of 1996 through the University of Maryland, College Park, Library. In this catalogue is contained bibliographical information on 3,440 titles of children's reading materials (excluding picture books and comics) of the Prange Collection.

The Prange Collection is noted as a Japanese national treasure document of the Post-War Period. This is due to the fact that belonging to this collection are publications from an extremely wide range of fields, which were submitted for purposes of being censored by the General Headquarters, Supreme Commander of the Allied Powers. This G.H.Q.-S.C.A.P. censorship continued for four years, from the fall of 1945 to the fall of 1949. Children's publications of this period included newspapers, magazines, and children's books. Many do not belong to any library in Japan but are irreplaceable documents of great value for research in Post-War children's literature and cultural history.

The purpose of this article is to present an outline and some characteristics of children's reading materials published in the period of occupation and censorship. I have begun to do this by attempting to discern the characteristics of children's reading materials from the materials recorded in the magazine *Seikatsu Gakko* [Life School] and the *Publication Yearbook*, which were published in this period. I have also attempted to analyze the bibliographical information in *Occupation Period Censored Children's Books Catalogue*, as well as present an outline of children's reading materials.

## はじめに

1996年9月に『占領期検閲児童書目録』上巻<sup>(註1)</sup>がメリーランド大学カレッジパーク図書館から刊行された。同時に図書館のオンライン・システムOCLC<sup>(註2)</sup>にも登録されたという。この目録にはブランゲ文庫所蔵児童書のうち絵本、漫画を除く児童読物3,440タイトルの書誌情報が収められている。刊行に先立ってオープニングのレセプションと所蔵児童書の展示が、8月1日にメリーランド大学・マッケルディン図書館で催され、筆者も招かれ参加することができた。

ブランゲ文庫には(以下、文庫とする。)、GHQ・SCAP(連合軍最高司令官総司令部)の検閲を受けるため検閲局に納められた日本の出版物と、占領関係の資料が保存されている。この期の出版物は日本の図書館にも所蔵されていないものが多く、文庫は戦後史資料の宝庫として注目されてきた。コレクションの中には、日本全国で出版された児童雑誌、児童新聞、児童書も保存されている。戦後間もなくの児童文学・文化研究に欠かせない貴重な資料群である。そうした意味からも、目録の刊行は研究者をはじめ関係者が心待ちにしていたものである。

筆者はメリーランド大学のExchange Visitorとして、1995年度の7ヵ月間アメリカに滞在した。この間、所蔵児童書8,000冊の整理と書誌情報、検閲情報入力の仕事を担当させていただくことができた。50年近い歳月を経て傷んだ本の1冊1冊を手にしながらか、あらためて原資料から学ぶことの大切さを感じた。また、作業を通して、戦後50年の子どもの文化の歩みについて考える機会にもなった。筆者の滞在中は所蔵雑誌、新聞等の永久保存作業のため文庫は閉館中であり、調査・研究は許されていなかった。

この小論では、占領・検閲期に出版された児童読物の概要と特徴を明らかにしたい。そこで『占領期検閲児童書目録』上巻の書誌情報を分析し、

その概要を把握すること、あわせて、この期の児童書について記録されている『出版年鑑』、雑誌『生活教育』からその特徴を読取ることを試みた。

## 1. 戦後史資料の宝庫・ブランゲ文庫

ブランゲ文庫はアメリカ合衆国・メリーランド州立大学・マッケルディン図書館にある。ワシントンDCに隣接するカレッジパーク市のキャンパスでは学部、大学院生、博士課程など約32,400人の学生達が学んでいる。メリーランド州立大学は1859年に農学校としてスタートし、1920年から総合大学として発展し現在に至っている。ブランゲ文庫の正式な名称は「Gordon W. Prange Collection & Archive」という。1978年に、メリーランド州立大学の教授・歴史学者であったブランゲの功績を称えて命名されたものである。

G・Wブランゲは1910年にアイオワ州で生まれた。アイオワ州立大学で学び、1938年にメリーランド州立大学に歴史学の講師として就職。1942年に助教授、1946年に教授となり1980年に没した。在職中の1945年～1946年にGHQ・SCAPの統計局で仕事をした後、アメリカに戻る。その後、GHQ・SCAP参謀二部の部長であったウイロビー少将に請われて再び来日。参謀二部の歴史部主任を経て、1951年には歴史部長となった。『マッカーサー太平洋戦争報告書』の編纂者、『トラトラトラ』の著者として知られている。

1949年になって歴史学者であるブランゲは、同じ参謀二部の検閲局にあった検閲済みの出版物に着目した。ブランゲは、あらゆる分野の出版物には敗戦後の日本、日本人の思想、生活などが映し出されている貴重な歴史資料であると考えたからである。そして、所属するメリーランド州立大学に譲り受けた旨をウイロビー少将に申し出た。この資料を巡っての争奪戦もあったと伝え

られているが、1949年12月にメリーランド州立大学に譲渡されることが決定。1950年1月から、木箱に詰められた500箱を越える出版物が船便で順次アメリカに向けて送られた。しかし、メリーランド州立大学に収められた後、この木箱が開けられたのは1962年になってからのことだという。

これらの資料が整理・カタログ化されるまでには、大学の事情でさらに長い時間を要したようだ。1963年からカタログ部の中の東亜図書部で整理が行われ、6年間で13,000冊がカタログ化された。その後、文庫の所属も公共事業部、特別資料部、保存部などに変わり、1992年から図書館長直属になった。<sup>133)</sup>

50年を経て仙花紙などの粗悪な紙に印刷された資料群は、傷みが激しく自壊が進んできている。資料群の永久保存のための作業は、1992年から文庫を閉館して集中的に行われている。文庫に所蔵されている資料は、多種多様で新聞、雑誌、単行本、楽譜、報道写真、パンフレットなどに及ぶ。次に、資料群の主なものを取りあげる。<sup>134)</sup>

## 雑誌

約13,000種の雑誌が保存されている。永久保存の仕事は、1992年4月から、メリーランド州立大学と日本の国立国会図書館の共同作業で始まった。

国立国会図書館が文庫資料の中から雑誌に注目したのは、その80%が国立国会図書館には所蔵されていないことがわかったからだという。文庫所蔵雑誌の60%が、職場の文芸誌や校友会誌などを含む、いわゆる非営利目的の雑誌である。もちろん児童雑誌も含まれている。作業は4年間の計画で進められ、雑誌と検閲局に提出された検閲に関連する書類もマイクロ化された。1995年8月からメリーランド大学のマッケルデイン図書館と、国立国会図書館の憲政資料室で(1996年11月現在でアルファベット順のRまで)閲覧できるようになった。

## 新聞

地方新聞、子ども新聞など含む約18,000紙が保存されている。出版物の中でも新聞の紙質は一番粗悪で、特に自壊が激しいという。

永久保存のための作業は1993年から始まった。1996年からマイクロ化に入り、1998年に終了の予定と聞く。日本でマイクロフィルムを閲覧できるのは、まだ先のことになりそうである。子どもの新聞や地方紙は、最も捨てられやすいものである。特に子どもの新聞は、地元の図書館でも保存されていないことが多い。子どもの文化研究の貴重な資料である新聞を、マイクロフィルムによって閲覧できる日が待たれる。

## 単行本

約70,000冊保存されている。学術書、文芸書、講談本から実用書までありとあらゆる分野の本が所蔵されている。このうち約15,000冊はカタログ化されていたが、残りは1994年夏から整理が始まったという。

単行本のうち学校教育関係の図書は1986年から整理が行われ、約10,000冊が国立教育研究所のデータベースに入っている。

絵本、マンガを含む児童書は、約8,000冊といわれている。検閲局には2冊ずつ納入することになっていたのも、複本も多い。このうち児童書の整理、書誌情報と検閲情報の入力には1995年の4月から始まった。前述したように、1996年9月に『占領期検閲児童書目録』上巻が完成し、OCLCにも登録された。

## 2. 出版物の検閲

敗戦後の1945年10月から、占領軍はマスメディアの徹底した検閲制度を施した。検閲の対象は新聞、雑誌などの出版物はもちろんのこと、放送、映画などのメディアや電信電話、手紙などの通

信手段にまで及んだ。占領軍はこれらのメディアから情報を収集し、同時に言論を統制した。検閲は1949年10月までの4年間続いた。

検閲に例外はない。児童出版物も当然、検閲の対象となった。刊行された目録には検閲の情報は掲載されていないので、児童書の検閲についての考察は今後に委ねたい。検閲の基準となった「日本出版法」、いわゆるプレスコードは次のようなものである。

米軍太平洋陸軍総司令部  
参謀次長 民間検閲部

昭和20年 9月21日

日本出版法

連合軍最高司令官の意を受けて、日本に出版の自由を確立するために、日本出版法を発令する。此の出版法は出版を制限するものでなく、寧ろ日本の出版機関を教育し、出版の自由の責任と重要性とを示さうとするものである。従って、報道の真実性と宣伝の排除といふことに重点を置いてある。此の出版法は日本の凡ゆる新聞紙の報道、論説広告及び総ての出版物に適用するものである。

その全文次の通り

- 1 報道は嚴重に事実にかねばならない。
- 2 直接にせよ間接にせよ公安を妨ぐる様な記事を掲載してはならない。
- 3 連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない。
- 4 連合国占領軍に就いて破壊的批評や占領軍対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない。
- 5 公式に発表されない限り、連合軍隊の動静を掲載してはならない。
- 6 報道記事は事実にし、記者の意見は少

しも加てはならない。

- 7 報道記事は宣伝価値を持たせる様に色ずけてはならない。
- 8 さして重要でない報道記事を誇張したり、宣伝的意味をつけたりしてはならない。
- 9 報道記事は関係ある事実又は詳報を省略してゆがめる様なことをしてはならない。
- 10 新聞編輯に當って宣伝のためにする目的をもって必要以上に重要性を報道記事に付与してはならない。

(原文のまま)

以上

検閲は下記のように、三つの地区に分けて行われた。民間検閲局地区本部が置かれたのは、第1地区は東京都、第2地区は大阪市、第3地区は福岡市であった。発行した出版物はすべて検閲を受けるために民間検閲局に提出しなければならなかった。

- 第1地区 北海道、青森、岩手、宮城、秋田  
山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、新潟、山梨、長野
- 第2地区 富山、石川、福井、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、岡山、徳島、香川、愛媛、高知
- 第3地区 鳥根、広島、山口、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島

第1地区に含まれていた北海道は、1948年10月から第4地区となり地区本部は札幌に置れた。

占領期に出版された児童読物

3. 「占領期検閲児童書目録」上巻にみる  
児童読物の概要

出版点数

目録に掲載されている児童書は、検閲が行われていた4年間の被検閲児童書のうち児童読物3,440点である。表1は、出版年度別の内訳を、半期ごとにみたものである。1945年度下半期が6点、1946年度は311点、1947年度は678点、1948年度は1,471点、1949年度は968点となっている。この数字から、年を重ねるごとに出版点数を伸ばしていることがわかるが、特に1948年以降の伸びが顕著である。

表1 年度別出版点数

年度	出版点数	
	計	内訳
1945年度	6	下半期 6
1946年度	311	上半期 187
		下半期 124
1947年度	678	上半期 315
		下半期 363
1948年度	1471	上半期 689
		下半期 782
1949年度	968	上半期 568
		下半期 400
年度不明	6	
計		3440

\*10月まで

出版物の種別

出版物の種別を示したのが表2である。目録のタイトルや著者からの分類なので正確さには欠けるが、概要を把握するために試みた。文芸書が全体の約88%を占め、科学物が約11%となっている。文芸書の内訳は童話などが52%、少年少女小説が39%、その他8%となっている。特徴的なのは少年少女小説が多く、読物全体の中で3割を占めていることである。

表2 出版物の種別

種別	点数	内訳	点数
文 芸	2991	少年、少女小説など	1180
		童話	1577
		詩、童謡	28
		戯曲	76
		伝記など	130
科 学	367		
その他	82	子どもの作品	30
		実用書など	52
	3440		3440

出版地

表3は、出版地を示したものである。読物の8割が東京での出版で、近畿地方で1割強、その他、中部、北海道での出版となっている。戦禍で設備の9割、出版能力の9割を失ったといわれる東京だったが、復興も早かったという。それにしても児童読物の8割が東京での出版であったことに驚く。この間、紙や印刷工場を確保するために地方に疎開したり、支店を設けた出版社もあった。従って、同一タイトルの本を東京と札幌で出版することなども行われていた。

表3 出版地別点数

出版地	出版点数
北海道	72
東 北	3
関 東	2795
中 部	77
近 畿	433
中 国	30
四 国	8
九 州	19
不 明	3
計	3440

出版社

出版社の総数は、740社にのぼる。うち5割を越す402社は1作品のみの出版で、10作品以上の出版社は70社で1割に過ぎない。青少年懇話会の関野嘉雄は、「22年現在としては287社」が青少年図書を手がけていて、「その7割にあたる203社は、22年になって始めてこの方面に手をつけたものである。」<sup>(48)</sup>と記されていて、児童書をはじめ手がける出版社が急増する様子を知ることができる。4年間の出版状況を知る資料として、20作品以上を出版した出版社と主な出版物のジャンルを次に記してみる。

- ・145 偕成社(少女小説、少年小説、名作童話、伝記など)
- ・115 大日本雄弁会講談社(少年小説、世界名作童話、創作童話、伝記、科学読物など)
- ・70 光文社(少年小説、日本名作童話など)
- ・68 国民図書刊行会(創作童話、教室文庫<科学物>、新日本小国民文庫、翻訳など)
- ・67 ポプラ社(少女小説、少年小説など)
- ・61 東光出版社(少女小説、少年小説など)
- ・53 愛育社(愛育文庫、少年小説など)
- ・38 中央公論社(ともだち文庫)
- ・38 小学館(小国民シリーズ、なかよし文庫、科学読物など)
- ・36 二葉書店(二葉文庫、学年別童話など)
- ・36 桜井書店(創作童話、こどもかい文庫など)
- ・35 妙義出版社(少女小説、少年小説など)
- ・35 文祥堂(たのしい科学<科学物>など)
- ・32 童話春秋社(世界名作童話、日本名作童話、創作童話など)
- ・30 まひる書房(少女小説、少年小説など)
- ・30 昭和出版株式会社(創作童話など)
- ・29 東和社(少女小説、少年小説など)
- ・28 啓文社(学童文庫)
- ・25 小峰書店(翻訳童話、創作童話など)
- ・25 羽田書店(翻訳作童話、創作童話など)
- ・22 広島図書株式会社(銀の鈴文庫)

- ・20 むさし書房(少女小説、少年小説など)

大日本雄弁会講談社には、北海道支店・札幌講談社も含めた。上記の出版社のほとんどが東京であるが、文祥堂、むさし書房は大阪、広島図書出版株式会社は広島の出版社である。

著者

目録に記載されている著者名は1,221で、内訳は国内1,149名、6団体、外国66名である。1作品のみのものが約7割を占める。10作品以上の作家を抽出してみると、次のようになる。

・南洋一郎	37	・野村胡堂	15
・池田宣政	18	・与田準一	15
・吉屋信子	29	・村岡花子	15
・小川未明	29	・水島あやめ	14
・鈴木三重吉	28	・水谷まさる	14
・坪田譲治	27	・サトーハチロー	14
・山中峯太郎	25	・南沢十七	13
・久米元一	24	・土家由岐雄	13
・海野十三	24	・関 英雄	13
・楠山正雄	23	・西田稔	12
・酒井朝彦	23	・石森延男	13
・加藤武雄	22	・宇野浩二	12
・奈街三郎	18	・宮沢賢治	11
・高垣眸	18	・塚原健二郎	11
・浜田広介	18	・佐藤義美	11
・西条八十	15	・二反長半	11
・横山美智子	15	・豊島與志雄	11
・小出正吾	15	・小西茂木	11

鈴木三重吉、坪田譲治、小川未明、浜田広介、奈街三郎などは童話作家として、吉屋信子、加藤武雄、山中峯太郎、海野十三、高垣眸などは、少年・少女小説作家としての活躍していた。

群を抜いて作品数が多いのは、南洋一郎＝池田宣政の55点である。冒険探偵小説では南洋一郎を、伝記物語では池田宣政の筆名を使っていた大衆的児童文学作家として知られている。

## 価格

価格の推移をみるために、目録の中から重版をピックアップして見た。次にあげるのは同一出版社のもので、Aは同年に重版した本、Bは年度が異なる場合の重版である。同年の重版でも、値上げしているものが多い。また、値上げ幅も大きく異なる年度の重版をみていると、敗戦後のインフレの凄まじさがわかる。

### A

- ・B6版 120頁 46/ 6— 8円→46/11—10円
- ・B6版 186頁 47/ 1—25円→47/ 6—35円
- ・B6版 147頁 47/ 2—18円→47/10—33円
- ・B6版 178頁 47/ 7—38円→47/11—42円

### B

- ・B6版 141頁 46/ 8— 8円→47/ 4—25円
- ・B6版 157頁 46/10— 2円→47/10—35円
- ・B6版 279頁 46/ 9— 9円→47/ 3—20円→48/ 7—27円
- ・B6版 162頁 47/ 5—29円→48/ 6—55円→49/ 1—75円

## 4. 『出版年鑑』、雑誌『生活学校』にみる占領期の児童書

これまで目録に記載されている児童読物を概観した。ここでは当時の児童出版物について記録されている『出版年鑑』と雑誌『生活学校』から、占領期の児童読物について考えてみたい。いずれも1946年、1947年の2年間に限られてはいるが、占領期の児童出版物の特徴を良く映しだしていると考えからである。

まず出版点数からみよう。『生活学校』<sup>(98)</sup>1948年1・2月号には、「終戦直後の数ヶ月はほとんど姿を見せなかった青少年図書も、21年春頃からは次第に増加の勢いを示し、22年になると完全にかつての盛況を再現するに至っている。」<sup>(99)</sup>とある。

『出版年鑑』で戦中の児童読物の出版数をみると、1942年1659点、1943年は1183点であるが、1944年には249点で前年の四分の一となり、1945年では32点に激減している。

出版点数の推移から、後半の出版界は、文化

統制に加えて極度な用紙・物資不足、出版の中心であった東京が、頻繁な空襲のためほとんど機能しなかったことがわかる。

敗戦後の児童読物出版数は『出版年鑑』によると1946年225点、1947年443点である。1948年は出版年鑑が刊行していない。『全日本出版総目録』昭和23年版によると、児童書・文学は1500点余となっている。出版の中心であった東京は戦禍により出版能力の9割を失ったといわれる状況から、年を追って回復していく様子がうかがえる。出版点数では1948年になって、1940～42年当時の水準に回復したと考えられよう。

次に出版内容についてみよう。『出版年鑑』には、戦後まもなくの児童書出版について「過去の痛手に禍わされてか、残存紙型を活用しての再版もの以外、新企画のよって見るべき書籍は、遂に出版し得られなかった。」<sup>(100)</sup>とある。1947年度は「昨年以来はらんしていた粗悪な書籍や絵本は姿をけし、ようやく本らしい本が、この年のはじめ頃から町にあらわれるようになってきた。」<sup>(101)</sup>とあり、児童書の質の変化が見られるようになったことが報告されている。

さらにジャンル別にみると、創作では『出版年鑑』に次のような解説がある。1946年度は「ようやく書き下ろし作品が数を増すようになってきた。(中略)依然として旧作のむしかえし出版が活発で、それは特に大家といわれている人の作品に多かった。」<sup>(102)</sup> 1947年度になると「自由な、空想的な風刺に富んだ社会性をもった童話が現れるようになってきた。」<sup>(103)</sup> と、創作分野での変化を評価した記述になっている。

翻訳物では『出版年鑑』に、1946年度は「著実な訳書もあらわれたが一方では安易な翻案書が続出した。読者が年少者であるという点、原作の意図、雰囲気をも簡明に伝えた翻案書の出版は希望されながらも秀れたものは少なかった。」<sup>(104)</sup> こと。1947年度も前年と変わりはないと報告している。

『生活学校』1948年10月号では、「翻訳青少年図書の諸問題」の座談会が企画されていて興味

深い。敗戦後の出版界は翻訳物に力をいれていて、「全体の文芸書の三分の一を海外の童話や小説の翻訳が占め」、「戦前のいかなる時代にも見られなかった大きな数字ではないかと思う。」<sup>(113)</sup>とある。翻訳物の増加はこの期の特徴の一つと考えられるが、1948年度以降は少年・少女小説の出版が勢いを増していくので、翻訳物の占める割合は2割にとどまっている。

少女小説の約9割近くが、1948年から1949年にかけての出版で、この期のもう一つの特徴といつてよい。『生活学校』1948年7月号には、冒険・探検小説の特集が組まれている。敗戦後の児童書出版を振り返って「童話物が絶対的な勢いを占め、子供向きの文芸図書の60%以上になっていたのですが、今年になってから童話ものと小説ものとの比率が完全に逆になり(中略)、その一番端的の現れが冒険小説の非常な増加となってきた」<sup>(114)</sup>と述べている。『出版年鑑』にも、1947年度は「読物にあつては冒険などの物語が多い。興味とスリルのみを中心として描いた作品が目だっている」<sup>(115)</sup>ことを指摘している。出版数の非常な増加を見せた少年・少女小説が、質的には批判の対象となるものが少なくなかったことがわかる。

科学読物については、『出版年鑑』に1946年度は「科学・文化に関する良書も出版されたがその数は少なく、多くは再版ものであった。」<sup>(116)</sup>翌年は「文化自然科学に関する図書は新刊書が次第にその数を増し」<sup>(117)</sup>とある。「たのしい科学」(文祥堂)、「子供の科学文庫」(誠文堂新光社)など、シリーズものをはじめとする科学物の刊行は1948年、1949年に多い。

## おわりに

戦後間もなくは児童書を手がける新設の出版社が続々と生まれ、出版点数を伸ばしてきた。しかし、その質は必ずしも量に比例していなかったことが上記の記録からも読み取れる。戦後間もなくは、本を出せば売れた時代といわれる。戦中欲しくても手に入らなかった時代が続いたことを考えれば本・文化への要求がどんなに強かったかを知ることができよう。そうした要求を背景にして良質の児童書も出版されているが、なかには安易な児童書づくりに走る出版社があったことも否めない。そして何よりも、敗戦による価値観の転換で作家も出版人も、子どもたちにどのような本を提供すべきか確信がもてなかったのではないだろうか。名作物や知名度の高い作家の作品が多いのは、無難なものの出版に落ち着いたからであろう。翻訳物では翻案も多い。そしてアンデルセン童話、グリム童話、イソップ、アラビアンナイト、孫悟空などは類書が多く、訳者名が記されていない本も見受けられる。

前述したように、この期の特徴の一つは少年・少女小説の多さであろう。その量の多さにも驚かされるが、次第に冒険、探検、怪奇、痛快、熱血などを冠した内容になびいていく様子が目録からも読み取れる程である。もう一つの特徴は文庫ものが多いことが指摘できよう。「ともだち文庫」「こどもかい文庫」など文庫ものの出版が目につく。68社もの出版社が手がけているが、「ともだち文庫」のように着実に出版されたものもあるが、3号雑誌のように1、2冊で終わっているものが多い。

科学読物の出版は戦前の反省からか、子どもたちに科学的なものの考え方を身につけることを願っての企画だといえよう。シリーズで組まれたものが多い。文庫やシリーズ形式をとった理由の一つは、用紙の配給を受けるためと考えられる。社会に貢献できる企画に、用紙が優先的に割り当てられたからである。



この小論では、目録から読み取れる情報と当時の児童出版に関する記録から、検閲期間に出版された児童読物の概要をとらえたものである。詳しい分析、考察は原資料の調査はもちろんのこと、絵本、漫画の目録の刊行を待って試したい。そして、児童出版物の全体像を知るために、既にマイクロ化された児童雑誌と、現在マイクロ化が進められている児童新聞を合わせての研究を進めたいと考えている。

加えて、児童書検閲についての研究も欠かせない。日本の児童文学は二つの検閲を経験している。重い課題であるが、戦後50年を経た今、戦中、戦後の二つの検閲が日本の児童文学・文化にどのような影響を与えたのか、どのような意味をもったのかを検証することが必要だと考えるからである。

## 注

1. Occupation Period Censored Children's Books Catalogue Part 1 1945-1949  
Edited by Hisayo Murakami  
Compiled by Eiko Tani  
Published by The University of Maryland at College Park Libraries  
September, 1996
2. 1967年オハイオ州コロンバスに設立されたオンラインで、書誌情報サービスを提供する非営利団体。約8000の図書館、情報センター等が参加していて世界各地で検索できる。
3. 村上寿世「プランゲ文庫について」第1報【出版クラブだより】No.338に詳しい。  
財団法人日本出版クラブ 1995年
4. 村上寿世「プランゲ文庫—占領期検閲局に残された日本の出版物」に詳しい。  
【図書館雑誌】Vol.89, No.8 財団法人日本図書館協会 1995年
5. 関野嘉雄「戦後2年間の青少年図書—青少年文化懇話会第1回推薦図書をめぐって—」復刻版 戦前・戦後【生活学校】昭和23年1、2月号 教育資料出版会 1980年 42頁
6. 戦後発行の【生活学校】は、当時の児童書について知ることができる貴重な資料である。【生活学校】は、「児童の村生活教育研究会」によって1935年に創刊された総合文化雑誌だが、戦中、弾圧にあい終刊。戦後1946年10月、戦前の民主教育の遺産を継承、発展させることを願って再刊。合併号が多いが1949年8月まで続いた。  
1948年1月から青少年文化懇話会が編集を担当。この会は1946年に青少年文化の振興をはかるために設立された。関野嘉雄によると、「もともと青少年のための出版物を中心とする青少年文化の改善向上をめざして集まった」という。【生活学校】誌上には1946.47年度の出版物の分析、推薦図書、書評、ジャンル別の分析等、精力的に取組まれて興味深い。委員長・中野好夫、委員には波多野完治、吉田甲子太郎、小川一郎、菅忠道、藤田圭雄、大塚久雄、坂西志保、湯浅年子、宮下正美、牛島義友、武田俊雄などが名を連ねている。いづれも教育・文化分野の第一線で活躍していた人達ばかりである。
7. 5に同じ 41頁
8. 「書籍部門別3年史・児童」復刻版【出版年鑑】昭和19年版、20年版、21年版 文泉社出版株式会社 1978年 26頁
9. 昭和22年「書籍部門別1年史・児童」復刻版【出版年鑑】昭和22年版23年版 文泉社出版株式会社 1978年 18頁
10. 前掲書と同じ 19頁
11. 昭和23年「書籍部門別1年史・児童」復刻版【出版年鑑】昭和22年版23年版 文泉社出版株式会社 1978年 20頁

12. 9と同じ 19頁
13. 「翻訳青少年図書の緒問題」 復刻版 戦前・戦後『生活学校』 昭和23年10月号  
教育資料出版会 1980年 2頁
14. 「冒険・探偵小説について」 復刻版戦前・戦後『生活学校』 昭和23年7月号 教育史料出版会 1980年 2～3頁
15. 11に同じ 20頁
16. 9に同じ 19頁
17. 15に同じ

#### 参考文献

- 山本武利著『占領期のメディア』 法政大学出版局 1996年
- 江藤淳著『閉ざされた言語空間』 株式会社文芸春秋 1994年  
1951年
- 国立国会図書館受入整理部編『全日本出版物目録』昭和23年版 国立国会図書館管理部  
1951年
- 国立国会図書館受入整理部編『全日本出版物目録』昭和24年版 国立国会図書館管理部